

思い出します

『北帰行』はどいつして出来た？

田畑 光永

窓は夜露に濡れて
都すでに遠のく
北へ帰る旅人ひとり
涙流れてやまず

当協会の会員には、かつての「満州」、中国の東北地方に縁のある方々が多いから、この歌もご存知の方が多いと思う。『北帰行』である。戦中につくられた歌だから、70年ほどが経っているが、まだ生きている。

なぜ突然、この歌を持ち出したかといえば、じつはこの歌の作詞作曲者はその昔、私の上司だったので、時にこの歌を酒の肴にしたことがあったからだ。その作詞作曲者で私の上司だった人は宇田博さんという。私はTBSというテレビ局で記者を

していたが、1970年代前半、宇田さんはその報道局長、つまり上司だった。

宇田さんも相当な酒好きで、よく仕事が終わった夜、局長室に部下を集めて安上がりの酒盛りを開いた。そこでの話題は勿論、あっちへ飛び、こっちへ飛びだが、宇田さんは「満州帰り」だったから、話がそっちへ向うこともままあった。

ある夜、談たまたま『北帰行』に及んだ時、私はかねてこの歌について不思議に思っていたことを聞いてみた。というより、からんだと言ったほうが適切かもしれない。

「宇田さん、この歌へんですよ。一番の歌詞の情景は都を離れて、北へ帰る旅人でしょ。帰

るんですから、行き先は自分の家か、もつと漠然とふるさとか、ともかくそこが目的地のはずです。ところが三番に行くと、こうなります。

今は黙してゆかん
なにをまた語るべき
ここまではいいとして、次が問題です。

さらば祖国、いとしき人よ、
あすはいずこの町か

一番では、家かふるさとか、とにかくそこに帰って行ったはずじゃないですか。だから三番ではそこへ帰り着くのが順序なのに、一転して急に「さらば祖国」はないでしょう。帰るのか、出かけるのか、どちらなんです？」

宇田さんのこたえー
「バカなお前には分からない

だろうが、ちっともおかしくない。帰って、それから出かけたんだから」

「……？」

宇田さんによると、この歌の誕生の背景はこういうことだった。

第二次大戦末期、宇田青年は旅順高校の学生だった。日に日に戦局はきびしさを加えてくる。このままだといずれ自分も軍隊に召集されて北満か南方かに行かされそう。生きて帰れる望みは小さい。なんとかこの境遇から抜け出せないものか、と考えていた。その頃は海も危なくなつて、日本へ帰るのもおぼつかない。どうしたものか。

ある日、宇田青年はぼんやりと、三省堂の「世界地図帖」のユーラシア大陸を眺めていた。すると中国の東北からはるか離れてイスタンブールという地名が眼に飛びこんできた。なんだかロマンチックな名前に惹かれた。それにトルコは同盟国で、敵国ではない。物差しで距離を計ってみると地図では20センチ

メートルだ。いくら遠いとい
たって陸続きだ。1日に1ミ
リずつ進めば200日で着く
ではないか。よし、イスタン
ブールだ!

そこで旅順から家のある
瀋陽まで、まず北上した。そこ
をちょっと恰好つけて書いた
のが一番。瀋陽には中国人の
大きな米屋の息子に親友が
いた。その親友と語らって一
緒にイスタンブールを目指す
ことにした。

なぜ米屋かというと、中国
の米屋は収穫前に農村を回
り、屋号を染めた麻袋を農家に
配って収穫後の買い付け予
約とするのが慣行だったので
、麻袋を積んで馬車で行けば
怪しまれないという計算だ
った。

「出かけたんですか?」
「出かけた。その時はもう
これで日本ともおさらばだ
と思っただ。だから――さ
らば祖国――だ。ちっとも
おかしくないだろう」
「なるほど。でも――い
としき人よ――はうそでし
ょう?」

「うるさい!」
宇田さんによると、出かけた

には出かけたが、ちょっと行
たところで、その親友が農家
の娘に惚れてしまい、もう行
くのはいやだということで、
そこで挫折したのだそうだ。
しかし、それも果たして事実
かどうか。すべては宇田さん
の妄想の世界の出来事かも知
れない。

妄想的産物であれ、なんで
あれ、『北帰行』は生まれた。
この歌は引揚者とともに日本
に上陸し、戦後は歌声運動の
レパトリリーのひとつとして
歌い継がれた。

そしてこの歌がブレイクし
たのが、かの大ヒット曲『知
床旅情』のレコードのB面に
採用されてからだ。私の上司
だったころは、多分、印税が
一番入っていたころだったの
だろう、宇田さん、意気軒
昂たるものがあつた。

そのうち、さらに宇田さん
を喜ばせることが起つた。当
時、なかなか人気のある人
が(今でもあるのかな?)「マ
ヒナスターズ」という歌謡
コーラス・グループのリー
ダー、ワダヒロシ

(漢字を知らないのだ)とい
う人から「マヒナのために一
曲作ってください」と頼まれ
たというのだ。宇田さん、こ
とあるごとに「いやー、マ
ヒナに一曲書かなければなら
ないんだが、忙しくてねー」
などとほざくのを、こちら
は才能のなさを感じて、こ
つこつ聞かねばならなかつ
た。

やがて宇田さんは順調に昇
進し、役員になって、引退さ
れた。その間、マヒナへの一
曲は出来たのか出来なかつ
たのか知らない内に、宇田
さん、今度は本当に旅立って
しまった。

その後、なにかの集りの時
、そこにやはりTBSの先輩
作曲家の鈴木道明氏が同席
していた。この人は「ウナ
セラデイ東京」「赤坂の夜
は更けて」などいくつもヒ
ット曲のある人なのだが、
誰かが宇田さんの幻の一曲
のその後を聞いた。

すると、鈴木さん、急に
げら笑い出した。

「宇田のバカ、マヒナに
頼まれてその気になって、
家を改築した」

「じゃ作ったんですか」

「そうじゃない。家の玄関
が狭くて入らないと、広く
改築して、グラントピアノ
を買った。しかしいくら
グラントピアノでも、人
差し指一本でポツンポツ
ンでは曲など出来るはず
もない」

「エーッ 宇田さん、
ピアノ弾けなかつたん
ですか」

「弾けるも弾けないも、
あいづは音符も読めない」

「じゃ、『北帰行』は
どうやって作ったん
だろう」

「あれは口の中でごによ
ごによやってるうちに
出来ちゃったんだ」

「……」(一同哑然)

歌とはまことに不思議な
もの。プロの作曲家が一生
懸命作っても、大勢の人に
長く歌ってもらえるものは
なかなかない。ところが
素人がごによごによや
って出来たものでも、歌
われるものは歌われる。

この年末には久しぶりに
『北帰行』を歌ってみよう
か。

(会員・理事)